

新約聖書の中の奥義 第4回

□この学び全体のアウトライン

第一部 インTRODクシヨン

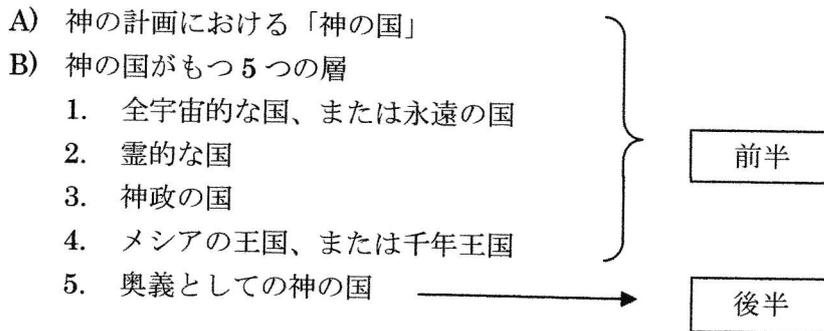
第二部 奥義としての神の国

第三部 教会に関する5つの奥義

第四部 イスラエルが頑なになることに関連する奥義

第五部 サタンの2つの奥義 と それを打ち破る神の8番目の奥義

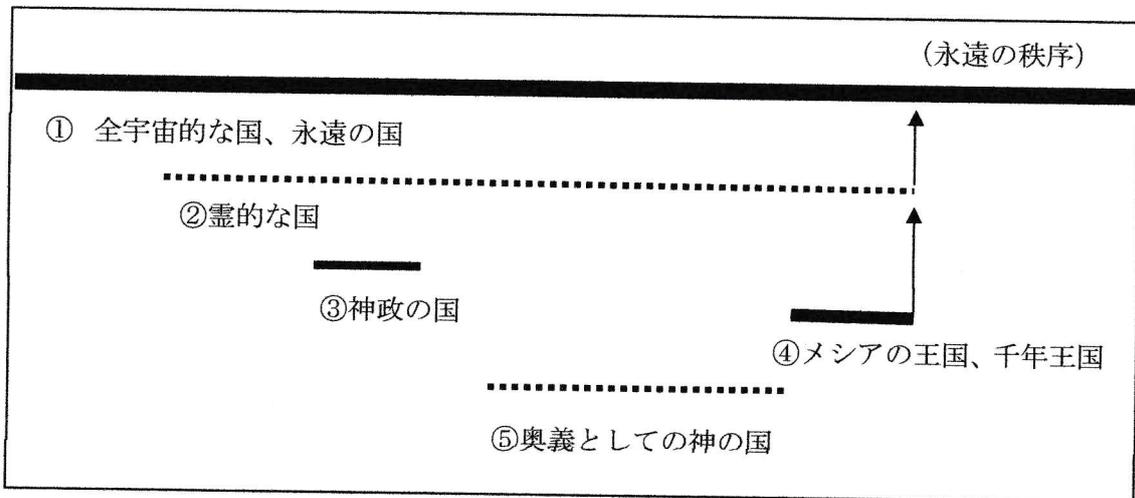
□第二部「奥義としての神の国」のアウトライン



□本日の内容

本日は、第二部 奥義としての神の国 **後半** です。

参考： 神の国の5つの層の概念図（実線：目に見える、点線：目に見えない）



B) 神の国がもつ5つの層

第5の層 奥義としての神の国

□前回のポイント

1. 神の計画の中で、神の国は、5つの層をもつ多層構造である。
 - (1) それゆえ、聖書箇所を比較して、一見矛盾するようなことがある。マルコ9:1では、神の国は目に見えるものである。他方、ルカ17:20~21では、神の国は目に見えない。
 - (2) これは矛盾ではない。どちらも神の国である。別々の層のことを言っているのである。(マルコ9:1 メシアの王国、ルカ17:20~21 奥義としての王国)
2. 5つの層のうち、4つは旧約聖書で明らかにされていた。第5番目の層だけが、旧約聖書では知られてはおらず、新約聖書において初めて明らかにされた。
3. 旧約聖書でも知られていた4つの層とは、全宇宙的な永遠の国、霊的な国、神政の国、そして、メシアの王国または千年王国、である。
4. 今回は、第5番目の層「奥義としての神の国」を扱う。

□本日のアウトライン

1. 定義
2. 奥義としての神の国のたとえ話
3. 9つのたとえ話のまとめ
4. 他の4つの層との区別、教会との区別

□定義

1. 「奥義としての神の国」という用語の由来
 - (1) マタイ13:11・・・ここでは、「神の国の奥義」について論じられている。旧約聖書では明らかにされていなかった神の国の第5の層についてである。そこで、第5の層については、「奥義としての神の国」と呼ぶ。
 - (2) 聖書の中にはないが、「キリスト教界」という用語がある。「教会」の中の1文字「会」を「界」に変えて、「教界」というと、教理的には正しかろうと誤ってしようと、とにかくキリスト教関係の集まりであることを標ぼうする団体がすべて含まれる。理想的な用語というわけではないが、現代における「奥義としての神の国」とは、「キリスト教界」と言ってもよいかもしれない。マタイ13章で描写されている状況は、「キリスト教界」そのものである。
2. 「奥義としての神の国」の始まりと終わりは次のとおりである。
 - (1) 始まり：マタイ12章でイスラエルの指導者たちがイエスのメシア性を否定した。その結果、イエスが提供しようとしていた「メシアの王国」は、そのときの世代のイスラエルから取り去られ、将来、大患難期のときの世代のイスラエルに与え

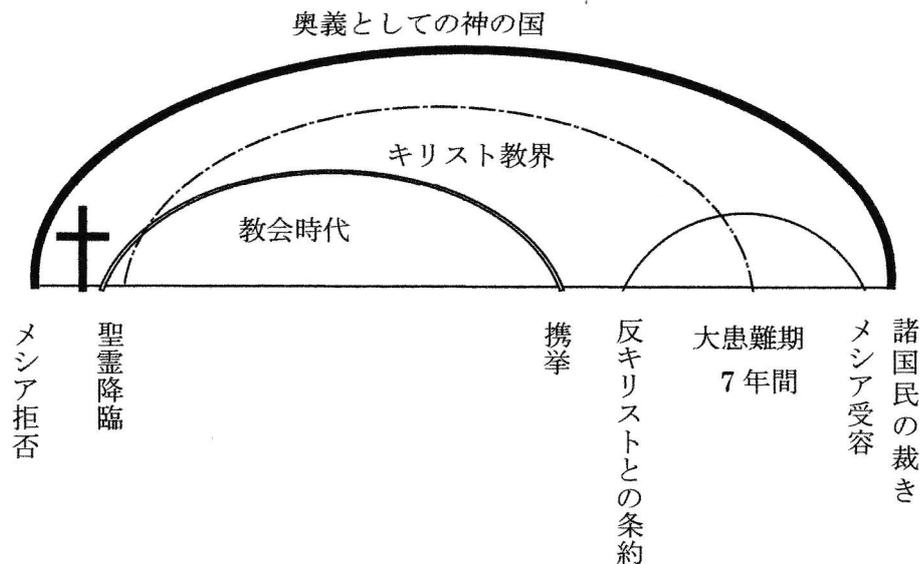
られるのを待つことになった。

(2) 終わり

- ① 大患難期の末期に、その世代のイスラエル民族はイエスをメシアとして認め、メシアに天から地上にお戻りくださいと願うことになる(マタイ 23:37~39、24:1~25:46)。
- ② これを受けて、メシアは天を出て、地上にお帰りになる。メシアの再臨。
- ③ その後、メシアの王国が始まるまでの準備期間が75日。その間に、諸国民の裁きがある。この裁きをもって、「奥義としての神の国」の時期は終わる。

3. 教会時代との関係

- (1) 奥義としての神の国は、マタイ 12章のメシア拒否から始まる。大患難期末期にイスラエル民族がメシアを認めると、メシアが再臨し、大患難期は終了する。その後、メシアの王国が始まるまでの準備期間が75日。その75日の間に、諸国民のさばきがある。その裁きをもって、奥義としての神の国は終了する。
- (2) 教会時代は、使徒 2章での聖霊降臨から始まり、教会の携挙まで
- (3) キリスト教界は、教会が誕生して後、偽の信者が入り込んで始まり、大患難期の前半における世界統一宗教(総本山はバビロンに)へと至る。大患難期の半ばで、反キリストがバビロンの世界統一宗教を打倒するときまで続く。



4. 「奥義としての神の国」とは、どのような国か?・・・マタイ 13章、マルコ 4章、ルカ 8章に記される9つのたとえ話は、奥義としての神の国の特徴を教えるものである。

□奥義としての神の国のたとえ話

1. 種まきのたとえ話 (マタイ 13 : 3~23)
 - (1) この国の時代的特徴は、福音の種まきがされること
 - (2) その種まきは、3つの妨害を受ける。鳥(サタンとその配下の悪霊たち)など
 - (3) その種まきは、4つの応答を受ける。第一は不信仰の応答、第二から第四は信者の3種類の応答である。
2. まかれた種は自ら育つことのたとえ話 (マルコ 4 : 26~29)
 - (1) まかれた福音の種は、内部にエネルギーを持っている。それ自体のいのちによって芽を出す。
 - (2) 芽を出すかどうかは、蒔いた人にはよらない。
 - (3) 蒔いた人は、種を蒔いたら、その後は、何もすることはできない。
3. 毒麦のたとえ話 (マタイ 13 : 24~30)
 - (1) 真の種まきを真似して、偽の対抗的な種まきがなされる。
 - (2) 2つの種まきは横並びで行われ、それぞれの種が成長していく。
 - (3) 成長の段階では区別されない。どちらの実を結ぶかどうかで、区別される。「わたしの倉に納める」とは、メシアの王国に入れるということ。
4. からし種のたとえ話 (マタイ 13 : 31~32)
 - (1) この国は、拡大成長する。
 - (2) 緑豊かな大木は繁栄と力の象徴(ダニ 4 : 11~12)であるが、「空の鳥たちが来て、その枝に巣を作る」。一番目のたとえ話では、鳥たちは、サタンとその配下の悪霊たちである。
 - (3) キリスト教界の中には、イエスを信じると標ぼうしつつも、本質的な教えを否定するような団体が現れる。
5. パン種のたとえ話 (マタイ 13 : 33)
 - (1) 女性が象徴的に用いられると、霊的あるいは宗教的な集団を指す。
 - ① いい意味の用例では、イスラエルは「ヤハウエの妻」であり、目に見えない普遍的教会は「メシアの花嫁」である。
 - ② 悪い意味の用例では、黙 2 : 20 の「イゼベル」、17 : 1~8 の「大淫婦」がある。
 - ③ このたとえ話では、悪い意味に使われている。教理的に誤った宗教組織を指す。
 - (2) パン種は、罪の象徴(1コリ 5 : 6~8)。特にマタイの福音書では、誤った教えを指す(マタ 16 : 6、11~12)。
 - (3) 「3サトンの粉」とは、歴史的にキリスト教界が3つの大きな組織に分かれることと符合する。ローマ・カトリック、東方正教(ギリシヤ正教やロシア正教)、そしてプロテスタントである。この3つとも「パン種」、すなわち誤った教理を持っている。
6. 隠された宝のたとえ話 (マタイ 13 : 44)
 - (1) 「宝」は、旧約聖書ではイスラエル民族を象徴する(出 19 : 5、申 14 : 2、詩 135 : 4)

- (2) イスラエルの大部分はメシアを拒否したが、神はイスラエルに少数の信仰者を残しておられる。彼らは、レムナント、イスラエルの残れる者である（ロマ 11:5）。
- (3) よって、このたとえ話で「宝」とは、奥義としての神の国の時期におけるレムナントである。ガラテヤ 6:16 では「神のイスラエル」と呼ばれるユダヤ人信者である。
7. 高価な真珠のたとえ話（マタイ 13:45~46）
- (1) 旧約聖書では「真珠」が象徴するものは特にない。教会がユダヤ人信者と異邦人信者とから成ること、6番目のたとえ話がユダヤ人信者のことであることを考えると、真珠は異邦人信者を指すと推測される。
- (2) 真珠は海から採られる。「海」は、異邦人世界を象徴する（ダニ 7:2~3、黙 17:1、15）
- (3) 46節の真珠は1個である。真珠が貝の中で徐々に形成されるように、異邦人信者の数も徐々に増えていく。そしてその数が満ちたとき（ロマ 11:25）、教会は完成し、教会は携挙される。
8. 地引網のたとえ話（マタイ 13:47~50）
- (1) 「海」は異邦人世界を象徴する。
- (2) 奥義としての神の国は、異邦人の裁きをもって終了する。
- (3) これは、マタイ 25:31~46 の諸国民の裁きと同じことを指している。
9. 家の主人のたとえ話（マタイ 13:51~52）
- (1) 「新しい物」とは、奥義としての王国。新約聖書で初めて啓示された。
- (2) 「古い物」とは、神の国のほかの4つの層。旧約聖書でも知られていた。
- (3) 神の国の弟子となった学者はみな、神の国の5つの層を理解する。それは、一家の主人が、自分の倉から新しい物も古い物も自由に持ち出してそれぞれ正しく用いることができるようなものである。

□9つのたとえ話のまとめ

1. 種まきのたとえ話→「奥義としての神の国」の時期を通じて、福音の種まきが行われる。
2. まかれた種は自ら育つことのたとえ話→蒔かれた福音の種は、内側にエネルギーを持っていて、自ら芽を出し、育つ。1番目と2番目のたとえ話の結果が、6番目と7番目である。
3. 毒麦のたとえ話→真の種まきが行われるところで、それに対抗して、偽の種まきが行われる。次の4番目と5番目のたとえ話は、この偽の種まきの結果である。
4. からし種のたとえ話→外面的には大成功して見事な成長をしていくかのように見えたが、結果的には怪物のような巨大組織になる。
5. パン種のたとえ話→内面的な腐敗、教理的な腐敗
6. 隠された宝のたとえ話→4番や5番の結果にはなっていくが、主のご計画は進んでいく。1番と2番によって、主は、イスラエル民族の中から、レムナント（イスラエルの残れる者たち＝少数の残りの者が信仰者となる）を得る。
7. 高価な真珠のたとえ話→主はまた、異邦人の中からも信者を得る。6番目でユダヤ人の

信者、そして7番目で異邦人の信者、この両者がひとつとるのが真の教会である。

8. 地引網のたとえ話→奥義としての神の国が終わるとき、大患難期もまた終わり、75日間の準備期間となる。この準備期間の間に起きる出来事のひとつが、「諸国民に対する裁き」である。大患難期を生き延びた異邦人たちは、義人たちとそうでない人々とに分けられ、義人たちはメシアの王国に入ることができる。
9. 家の主人のたとえ話→奥義としての神の国は、神の国の他の4つの層と似ているところもあれば、そうでないところもある。

□他の4つの層との区別、教会との区別

1. 全宇宙的な、永遠の国との区別
 - (1) 時間の観点で区別される。全宇宙的な永遠の国は、永遠に続く。それに対して、奥義としての神の国は、時限的である。イスラエルのメシア拒否で始まり、メシア受容、そして諸国民の裁きをもって、終了する。
 - (2) さらに、領域の観点で区別される。全宇宙的な永遠の国は、この地上だけでなく、全宇宙、物質界も、天使たちのいる霊の世界も含む。それに対して、奥義としての神の国の領域は、この地上だけである。
2. 霊的な国との区別：
 - (1) 国民の観点で区別される。霊的な国は、真の信者だけである。アダムから千年王国で最後に救われる人まで、すべての時代のすべての真の信仰者が霊的な国の国民である。それに対して、奥義としての神の国には、信者も不信者も両方がいる。良い麦も毒麦も、である。
 - (2) 「奥義としての神の国」の信者は、同時に「霊的な国」の国民でもある。
3. 神政の国との区別：国民の観点で区別される。神政の国は、イスラエル民族のみが国民である。奥義としての神の国は、ユダヤ人も異邦人も両方がいる。
4. メシアの王国との区別：支配者の観点で区別される。メシアの王国では、王であるイエス・キリストは、地上のエルサレムにいて地上の全世界を支配する。奥義としての神の国では、イエス・キリストは天におられる。
5. 教会との区別
 - (1) 教会時代は、奥義としての神の国の時期の中に含まれる。奥義としての神の国は、イスラエルのメシア拒否から始まるが、そのときはまだ、教会は誕生していない。
 - (2) 教会時代において、地上の地域教会の中には、信者と不信者とが混在する。信者の部分では、彼らは「良い麦」である。良い麦のうちユダヤ人は「宝」であり、異邦人は「真珠」である。
 - (3) しかし、教会時代が携挙によって終わったあとも、奥義としての神の国は続き、地上は大患難期へと入る。大患難期においても人は、神の恵みにより信仰を通して救われる。彼らもまた「良い麦」である。
 - (4) 大患難期は、奥義としての神の国の最終局面である。大患難期がイスラエル民族のメシア受容とメシアの再臨によって終わると、メシアの王国へと時代は移る。その準備期間である75日の間に、「地引網」でたとえられた諸国民の裁きがある。その裁きをもって、奥義としての神の国は終了する。